



仲間で用瀬アルプスに登った。もちがせ、と読む。流し雛で有名な鳥取市用瀬町にある。洗足山、おおなる山、三角山と連なっているその稜線を歩く。いちばん高い洗足山が標高七四三メートルに過ぎないので舐めてかかっていたら、アップダウンが思いのほかきつく、七時間の行程はなまり気味のからだにけっこうこたえた。その険しさからアルプスの名前が付いているというのを後で知った。警戒すべきだった。

行き帰りの車中のおしゃべりも旅の楽しみの一つで、特に目新しくもなく、どうかすると何度も聞いた話をおさらいさせられることも少なくないのだが、それもまた悪くない。

仲間の一人が、仕事で岩手に行ったときの話を始めた。ぼくは行ったことがないし、四十七都道府県の中で最も縁の薄いところでもあるので、どうやって行くのだろうと思つて聞いていたら、東京で一泊して飛行機を乗り継いだと言う。さすがに遠いところだと驚こうと思つていたら、東京のカプセルホテルに泊まつたら一泊九千円だったというところにもつと驚いてしまった。最安を探した結果ということだったが、簡易なシャワーがあるだけであとは寝るしかないところにその値段を払うのが東京というところであり、今のこ

時世なのだろう。

用瀬アルプスを無事下山し、智頭に向かった。初めての民泊である。智頭町では、宿泊施設の不足を民泊で補おうと町が公募して受け入れ先を募った。事務手続きとか集金業務などめんどうきそうなのはすべて役場が請け負い、宿泊者との交流に注力できるような支援している。ぼくが泊まつた家は、始めて十年ということだったが、宿泊者がメッセージを記した杉の端材が立木を模したオブジェにびっしりと連なっていた。

食後の後片付けを手伝ったりする他は、旅館とほとんど変わらず、食事、風呂、寝具いずれも何の不足もなかった。夕食はご亭主と食卓をとともにするのが決まりのようで、これは当地の文化や生活史を当事者に学ぶ特典と言えた。たまたま、その家は味噌や豆腐をつくる工房を備えていて、地場産業の一端を担い、雇用創出にも貢献しているところだったので、豆腐づくり体験もさせてもらった。大豆の香りが口中にぱつと広がるうまい豆腐とおからをどつきり持ち帰った。講習代は、材料費の二〇〇円のみ。宿泊費が八八〇〇円なので、合わせてちょうど九千円。

帰りの車中は、この二つの九千円について考えないわけにはいかなかった。くらくらするようなこの差は、いつたい何を表している？

老い老いに
木幡智恵美

10



夕焼け通信が始まって二年目となる一九九四年の年が暮れ、一九九五年に改まつて半月ほど経つた一月十七日の早朝五時四十六分。夫に起こされ地震だと気が付き、傍に寝ていた二男を抱え込んだ。どれくらい続いたのか、揺れが収まつたところで夫がテレビをつけると時刻は五時五十分。しばらくしてニュース速報が流れ出した。東海地方、次いで北陸地方に地震・津波に注意とのこと。山陰でも揺れを感じたこの地震は、マグニチュード七・三、震度七という、東日本大震災が起ころるまで戦後最大の自然災害となった阪神淡路大震災だった。神戸、西宮、芦屋などの大都市、淡路島を中心に大きな被害に見舞われ、犠牲者は六千四百三十四人に上つた。尼崎にいる伯父夫婦、従弟夫婦のことが気にかかり連絡をするがなかなか繋がらない。九州にいる従妹に電話をすると、伯父たちは茨城に行つていて、従弟たちも無事だとのことだった。それから連日震災関連の記事が新聞紙面を埋め、テレビ報道も続いた。知り合いにも親戚が被災したなどと聞き、地震の恐ろしさを身近に感じる大災害だった。

夕焼け通信には編集後記にこう記されている。『「関東大震災の教訓が何も生かされていない」朝日新聞に作家の吉村昭氏が憤りをこめて書いておられます。関東大震災で類焼の媒体などになつて災害を拡大させてしまったのは大八車。今回も自動車が増えました。教訓を生かすことは難しい、しかし、生かさなければ何のための犠牲であつたかということになります。』Aさんは、次のように書いています。『(前略) 今回のように自分の身体で地震を感じ、その体感した地震で大きな被害が出たとなると、被害実態も身近なものに感じる。と同時に、都会の真ん中で災害が起こっているのを見ると、いかに私たちの社会構造が自然災害にもろいかを痛感させられる。(中略) 日が経つに従つて、情報伝達、報道、交通、援助など、あらゆる面でいろんな問題も指摘され始めている。それらは、是非今後の防災のために役立ててほしいものだ。被災地の日も早い復興を願っている。』

あれから三十年、地震のみならず、猛暑、豪雨豪雪等々自然災害は人知を上回つて年々激しくなつていく。経験したことのない事態が襲いかかる中、なすべきことは何なのだろうか。

30代フリーター 衆院選で自公が過半数割れし、少数与党になった。かつて衆参ねじれ国会になったときにしきりに言われた「決められない政治」が久しぶりに戻ってくる。

年金生活者 「1強多弱」の「決めすぎる政治」に対して有権者が募らせてきた不満が選挙結果にあらわれた。

安倍晋三、菅義偉、岸田文雄と続いた「1強政権」の12年間は、安保法制の制定、無観客五輪の開催、防衛費の大幅増額、敵基地攻撃能力の保有など、数の力による「決める政治」の連続だった。その危うさに対し、「もう決めてなくていい」という批判が裏金事件を引き金として噴出したのが、今回の衆院選の結果と考えることができる。

それを真つ先に突きつけられたのが「1強政治」「決める政治」の総仕上げとなるはずだった憲法改正だ。改憲に前向きな自民、公明、維新、国民民主などの議席が改憲発議に必要な衆院の3分の2を下回った。

解散をした。裏金議員の扱いをめぐって最初は非公認を示唆しておきながら、一転して原則公認に傾き、批判されて一部を非公認にした。非公認候補の支部に税金が原資の政党助成金から2000万円を振り込んだ。有権者の反発を買うことがだれの目にも明らか。な方針を次々と打ち出したうえ、それがまたブレて国民の信用を失った。打つ手打つ手が裏目に出た選挙戦だった。

年金 そうなることをベテラン政治家の石破が予測していなかったはずがない。幹事長を始めとした党執行部からの要求を次々とまざるを得なかった結果だろう。そうしないと選挙の態勢も運動もまともに構築できないほど窮地に陥っていたと考えられる。「筋を通す政治家」との期待を受けていた石破としては屈辱的な選択だったに違いない。それでも受け入れたのは、安倍時代を終わらせるためという使命感があったからと推察される。

つまり普段なら悪手とされることを

ただし、国民は何から何まで「決めていい」と思っているわけではない。「決めていい」と考えているのに、与党が「決めない」ようにしてきた政策のひとつに選択的夫婦別姓制度の導入がある。自民党がそれに賛成せざるを得ない局面が出てくる可能性がある。

30代 なぜ国民は自公を過半数割れに追い込むほど裏金事件に怒ったのか。ロッキード事件が発覚したあとの衆院選でさえ、自民党は少数与党への転落を免れている。

年金 牧原出という政治学者が朝日新聞で次のように語っている。

「日本全体が右肩上がりだった戦後の高度経済成長の時代には、政治だけでなく社会のいろいろなところでも、こうした裏金のような慣行が黙認されていたのではないだろうか。しかし、いまはコンプライアンスが厳しい時代です。自民党は『領収書の切れないお金は許されない』という時代感覚から、大きくずれていたということだ

承知でやったということだ。自民党への逆風を煽るようなことをして裏金議員を落選させ、宿敵の安倍派を激減させたし、少数与党になることで、野党の主張を採り入れざるを得なくして、それを理由に党内の異論、とりわけ安倍派の残党の抵抗を抑えることのできる状況をつくり出した。

自民党がダメージを受ける道を選択すれば、それによって党内で最もダ

と思います」（10月29日朝刊）

そこにデフレからインフレへの急転にともなう物価高が加わり、国民をカネに敏感にさせた。長谷川慶太郎が指摘したように、東西冷戦の終結後の世界経済はそれまでのインフレ基調からデフレ基調に転換した。長谷川はデフレを「買いた手に極楽、売りに地獄」と言い表した。企業は価格競争に勝ち抜くために絶え間ないイノベーションを強いられる。それがさらに価格を押し下げると同時に、消費者にとっての利便性を高める。賃金が上がらない代わりに、質のいいモノやサービスを手に入れられる。

そんな「極楽」を捨てようとしたのが、デフレを悪としたアベノミクスだ。「機動的な財政政策」と称して、借金で企業へのバラマキを進めた。その恩恵を受けた企業が政治資金パーティーの券を買ひ、その代金が裏金化したケースもあつたはずだ。

30代 石破は早期解散を否定しながら、首相就任後8日という戦後最速の

ダメージを受けるのは安倍派だ。自民党という肉を切らせて、安倍派という骨を断つ。それが、さまざまめぐり合わせの結果、石破が採った戦略と考えられる。

30代 石破政権は短命という予測が大半だ。

年金 石破が退陣しても、少数与党対強い野党という構図は続くだろう。それが衆院選で示された国民の意思だからだ。

この状況は与野党双方に都合のいい面がある。政策の決定は常に与野党の合意を経なければならぬ。仮にその政策が実行段階で失敗したとしても、責任は与野党で分け持つことになり、これまでのように与党だけが批判されることはなくなる。野党にしてみれば、政権交代して旧民主党政権のように批判の矢を浴びるよりよほど楽だ。そして実際には失敗はめつたにないだろう。少数で決めるより、多数で議論して決めるほうがたいにいい結果になるという研究結果もある。

ニュース日記 944
中村 礼治

決めなくていい